

NEWSLETTER



大阪女学院大学 大阪女学院短期大学

教 員 養 成 セ ン タ ー

● 巻頭エッセイ 思考と言語 —日本語と英語の狭間で—..... 1	● 授業の玉手箱 オンライン辞書の作成に関わって..... 4
● 第3回「英語の教え方教室」 宿舎・勉強会 in 名張報告..... 2	● 書籍紹介 『人物で見る日本の教育』..... 4
・ 基調講演..... 2	● 第 37 回勉強会 「英語の教え方教室」 簡易報告..... 4
・ グループ討論①、グループ討論②..... 3	● 第 38・39 回勉強会 「英語の教え方教室」の予定..... 4

巻頭エッセイ 思考と言語 —日本語と英語の狭間で—

東條 加寿子

近刊『日本語の科学が世界を変える』を読んだ。好著で話題を呼んでいる。同書は、なぜ日本人は英語で科学をしないのかを問い、その答えとして、日本人は「英語で科学する必要がないから」と冒頭で断言している。その背景として、江戸末期に日本が西洋文明を取り入れた時代に、日本文化に存在しない概念について、対応する言葉の一つ一つ新たに創り上げていった、すなわち、日本は西洋文明を母国語で取り入れたのであり、その過程で、ユニークな近代日本語知識体系が作り上げられたと指摘している。そのため、日本語の中に、科学を理解し、創造的に発想し、新たな発見をするために必要な用語や概念、知識や思考法が十分に備えられていると説く。そして、日本語で科学することが、日本人科学者の独創的な発想や創作を可能にし、世界的な発見と発明を生み出し、多くのノーベル賞受賞者を輩出してきたとしている。

科学ジャーナリストの著者は、日本人による世界的な科学的発見・発明の経緯やノーベル賞を受賞した日本人科学者の研究成果を一例、一例、丁寧に説明しながら自論の裏付けを試みているが、中でも説得力があると私が感じたのは、湯川秀樹博士の中間子の発見と山中伸弥氏の iPS 細胞の発見についての著者の解釈である。いずれもノーベル賞を受賞した世界的な発見であることは言うまでもない。湯川理論が生まれるまでは原子核構成粒子には陽子と中性子しか認識されていなかったが、博士は両粒子の中間に中間子を発見したのである。その発見の土壌として著者は、欧米理論が二律背反で A か B か、あるいはあるかないかを問うのに対して、日本文化では「中庸」を許容し、中間点に真理や本質があるのではないかと考える傾向があると述べている。日本語で科学する過程で日本文化の特性が思考に影響を及ぼし、独創的な発見を生み出したというのである。

同書で取り上げられている興味深いもう一つの事例は、山中伸弥博士による iPS 細胞の発見である。iPS 細胞の実現は、再生医療の最先端をいく世界的な研究であるが、同時に生命倫理とのせめぎ合いを強いられるセンシティブな領域でもある。著者は山中博士の偉業の背景として、日本では生命発生学の領域が抵抗なく受け止められ、再生医療の進展が社会的に囑望されている領域であることを挙げている。日本では再生医療が倫理論争になることはなく、まして宗教論争になることはない。すなわち、聖書の精神的束縛から自由な日本の科学が iPS 細胞の発見に大きく寄与しているのではないかと、との解釈である。なるほどと思いつつながら、私は最近の一報道を思い出した。つい先ごろテレビでレポートされていた聖書博物館についての報道である。アメリカには科学博物館ならぬ聖書博物館なるものがあり、創世

記やノアの方舟など聖書に関わる展示が行われているようだ。聖書博物館は常時人気で、最近、この博物館の来場者を対象にヒトの起源についてアンケートを取ったという。その結果、ダーウィンの進化論を信じる人、ダーウィンの進化論を退け聖書の創世記を信じる人、そして、両者を受け入れることができる人が概ね同じ割合になることがわかった。進化論と聖書を同次元に並べ二律背反の枠組みで問うということ自体、日本人の発想にはないが、この事例を考えてみれば、なるほど日本では進化論は相対的に自然な形で受け入れられているといつてよい。再生医療ももしかと言えるのだろう。

くしくも、自然科学と母語の関係について言及しているもう一つの著書がある。『日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』である。ちなみに、タイトルがセンセーショナルでいささか難解な同書は、言葉の本質は「書き言葉」を読むことにあり、＜読まれる言葉＞を継承することが文化であること等を提唱している。具体的に、日本文学を読み継ぐことは大切な国語教育の一部であり、英語が「普遍語」となってインターネットが支配する時代に入って、英語や話し言葉にみられる表音主義が日本語の存続を脅かしていると論じている。その巻末で、自然科学と母語の関係への言及があり、母語が英語ではないことが生産的な結果をもたらさうのではないかと、日本語はその言葉で「科学ができるような言葉」であり、日本語で思考することが世界的な発見をもたらしているのではないかと、『日本語の科学』とアイデンティカルな主張を繰り返している。

本小稿では、科学を例にとって思考と言語、思考と文化の関係性について考えた。百年来、「科学の言語は英語」が疑いもない事実であるがゆえに、日本人科学者にとって「英語で科学することは必然ではない」という逆説的命題は示唆に富む。しかし断じて、日本人科学者にとって「英語で科学する必然性はない」ということは、「科学に英語は必要ない」ということではない。母語による独創的な発見や発明だからこそ、世界に発信することが一層重要になり、その発信言語は必然的に英語である。研究成果は科学コミュニティに英語で発信され、そこで認知されなければ世界的発見・発見にはならない。科学コミュニティにはルールがあり、そのルールに則った論理で表現・発信することが必要で、そのための英語力が強く求められている。

日本語と英語の狭間で、豊かな言語活動の可能性が切り拓かれていく。

松尾義之 (2015). 『日本語の科学が世界を変える』、筑摩書房

水野美苗 (2015). 『増補 日本語が亡びるとき —英語の世紀の中で』、ちくま文庫